

枚野
勝名院

南總里見八犬傳第七輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第六十八回

穴山の枯野ふ村長秋實を救ふ
猿石の旅宿ふ濱路濱路を誘ふ

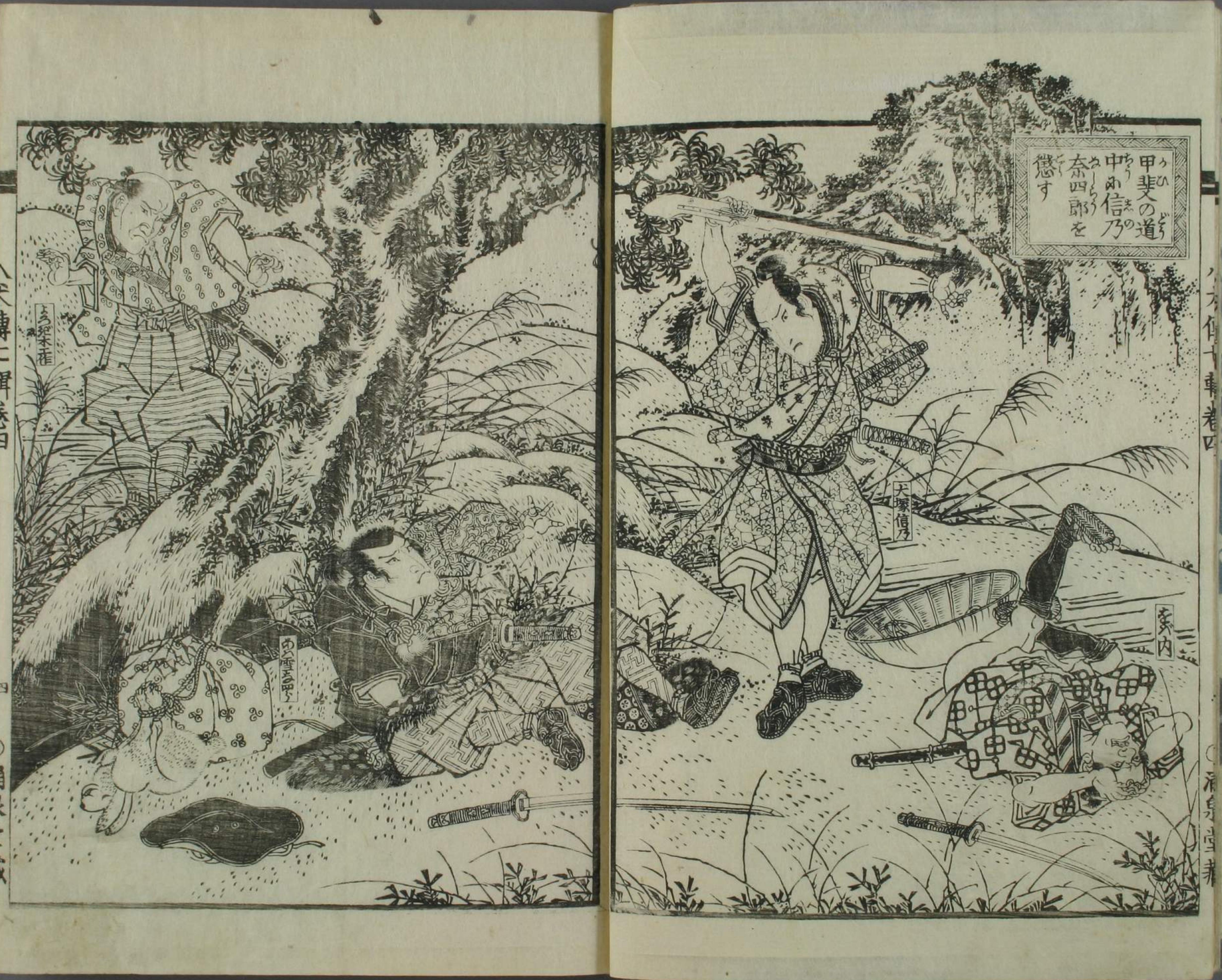
奈末與美の甲斐州へ州の四境皆山ふすと甲斐と名づけ。甲斐の峠
き。峠の間へ入食山の峠ふ住りよとてこれを甲斐とひ。抑富野穴山の西御へ
西ふ白峯鳳凰山。又法王山。大日山。妙見山。千葉山。あらかじ。おがく。おこ
金峰山。白峰。古歌ふ甲斐が峰と詠る。ゆきこの他身延山。七面山。夢山
狹山。櫻尾岳。嵐山。神座山。中山。篠子。天目山。あり。蕃山。禿山。ふ至り。僕るふ
追もあらず。されば當時の國守武田家の城へ八代郡躑躅崎ふ在り。あれを古府と呼
ふ。中府新府のひであつて。後世の稱呼へ就中富野穴山へ西と南北の三方
做せ。城の古碑。城井の古碑。第五の巻。古碑。

まよひ山ゆく又ある山脚み富士川わり酒川の中流を河鹿川と呼做り上を金無川
とありかまども此より當時村落四五六樵夫猶戸あらぬの徃還跡絶一麓
路へ然程ふ大塚信乃は富野穴山のほどり芒花とひく黄昏時背後より放り
鳥銃ふ左の腋を撃ひ立かども幸ひみ身み中らず袖の縫处处に銃丸へ抜けと仇を
間近くうそんと以ひがみが伏身を轉じて虚滅焉俟程み且とも一箇の武士齡へ
四十許年べ眼圓み色浅黒く蒼鬚頤み満そ身長高きが狩獵束み行縢り
紫銅作りの両刀を跨へひみ推勢する鳥銃と枯芒花を推分々々是方を投る事
後方より獲物の鬼を引提る一箇の奴隸從ひ至る件の武士は既みて信乃が身
邊に近づくと忽地膽を潰してこゝに什麼いふとぞうふ呆る事半晌たゞ
従者も亦うち駭きと口隠る頭を搔つ先後の人々來ると跪立て項を
伸せ遠見は薦間隠生の鷺鷺ふ似そ俱ふ心を苦しもす。かくあるまふわ

まことに。かくの件の武士の従者を刃かすく声と潛めあらふ居る。挾牡鹿の窓邊の
兩銃丸撃ひ田めさうと思ひよ。鹿あわで旅客を擊倒せり。も愆き。この人
手のひとに死ぬ。甚麼う。星の祟りてやか。非命ふ縛絶。主。孕さる。不せん術
あり。身か両刀を帶。御内人の親類を。他鄉らりある。ゆの。狹尙余
らん。ゆく。うそ。ひふ。死と耳しけ。後者も亦信乃を。ほくと。口を。声を。低め。現
宣する。どく。御内人の親屬ゆ。その方。ざまの人。知ら。敵手ぞれを。むか
かへ。折り。四下ふ。すう。人。疾。からき。か。といふ。然あり。と。頷き。主従二名
足を。やか。走去ら。と。てけ。を。忽地。又立苗。まく。媼内。何。と。思。彼旅客の両刀。
その刃。そ銳き。や鈍き。定ふ。知る。よう。き。ま。ども。表装。金銀。多く。較も。亦貴價
あり。且身の。ま。の。賤。か。ね。盤纏。腰。骨。う。世の常言を。引。あ。終。ど。毒を
啖つ。皿を舐。三人を殺。三。血を。刃すべ。と。ひ。と。あ。を。い。不。ぞ。や。宝の山。入。き。手を

真額臨く。研らんとまると信乃へ駆。矢鳥銃を受流。拂退く。六七合
戦ふ程。媼内をうなぐ身を起し。半鎧する中刀を抜。敵め。背後より。ち
近づくを尻目。みかくる。信乃。日比の本事と出し。銳と宛電光の薙尾を走る。
とす。既め。件の武士の刃を破。とお落す。背後内や。媼内が刃みを奪
異あらず。既め。件の武士の刃を破。とお落す。背後内や。媼内が刃みを奪
身を反し。肩尖丁と打つ。股居み檣と平伏す。透もあらせ。件の武士
組んと。組一も果。又。脣を破。と打ち。卷の刃を要時も。堪。云とぞ。ま
仰反す。主を資る。媼内。起あらんとまると。程。信乃。鳥銃。揚。又。媼内を
打伏す。本事。心怯む。件の武士も起し。と。程。信乃。鳥銃。揚。又。媼内を
立。彼。脊居ら。主従息も。免。と。叫ぶ。信乃。怒。声高
ち。汝。人を識ら。と。不良の心を起せ。と。睡。虎の鬚を曳く。鼠み似る白
徒。と。汝。心。惡。と。り。仇を寄せ。と。汝。と。倒臥。をあらざる。汝。人。と。よ
り。

空むるへとあく帰くる。とく人ひととうそ毒どくを死しむも。眞まことの丈じよまと死しむ。死人みにがれを要うき名な。刀とを今いま取くて捨てなげ。後悔ごひを立たかた。物ものせよと耳みみにこけ。媼めい内うち莞えん余よとうち笑わら。仰あお寢ね不ふ至し極きつせり。然しかば路銀ろぎんの山分やまぶく。僕わたくしも賜たまとか。とりとせむ果ご。頷うなづき。いふや及およく疾めせよとひそぐ。立たく主ぬし従従の舊きうの所ところみかへてあら且また先さき后うしをえ。かう。高たか媼めい内うちハ既既ふちや信しん乃の方ほうみ手てを被うけ。畧はんりんとあく。腕うでを信しん乃の臥お。楚すと捉つか。曳ひ一曳いっひきと投なげ蜚ひせ。媼めい内うちハ吐ぬ嗟あと叫さけ。筋斗きんとうまゝ身みを虧けが。三間さんげんをうりゆき。株くずの膾あざまを撲う惱うなづ。霎ま時ときの起おきもるぎりけり。件くだの武士士官の光景こうけい。駭おどくと大おほきあくび。持もる鳥銃とりじゆ振ふり。くそ轟ごうき。仆うしを信しん乃の透とおき。足あしを飛とく。亦また脇腹わきはらを礮のと踴はる。蹴けらまく苦くると叫さけ。鳥銃とりじゆ裏うらと投なげ。兩ふた三步みよ踏ふ地ぢ。刃はり。刀とを抜ぬんとまう。程ほどふ信しん乃のをあく。身みを起おき。送おくり。鳥銃とりじゆ揚あり。程ほどもあく。件くだの武士士官。刀とを昇ありと振ふ。



卷之四

洋島圖譜

え
ぬあつて命と乞ふと曰れ又打んや然づがまの依立別よどくいきゆう。といふ
むくまよろこ。りきを
木工作もくさく秋あきの物數ものすうあらぬ小人ちがいが寛解かんげきすまをうけ引ひく早はやの御許容辱ごきゆうにじゆ。
折おりう薄暮はく暮のるる此この鳥銃とりのじゆうハ小人ちがいが預あずり措あわせさの主從しゆしゆを先まふいきみいきみで刺さす。
送おとしの御凝念めいねんもきるべ。喃泡雪なまくわゆきさゑ所ところもああで行めゆひの間まの聞諭きりゆ
ゑゑが遺恨いがんあるべたる。この火炮ひぱうを送おとしぬ。ゑ、還もどせもどか。といふ
領りょうく武士士官主從しゆしゆハ刃のと歛ひく立たてりてりへそ趣きその意いを得とす。既すで小和睦こむだいの整そろふ。
いふ不遺恨ふいがんを含むむ。さゞと如お右う忍しのぐれ。そその鳥銃とりのじゆうハ和わ主しゆの預あずけを送おとしむ。の
ゑゑを私わたくしそそ人ひとゆゑゆゑ知しららぬ。そそひきき勞らーーる。謝あや義ぎそそちち物ものも。姫ひめ内うち
鬼きを進すすせよ。といふ奴隸やしづらハああるる四足よしゆつと括くわく一獲いりの兎とを兩ふた手て捧ささぐ
きき生なまを木工作もくさくうちうちく頭かぶをうちうち掉おちり。そそうもなを睨のぞみ配下ばいげふ世渡よ。

俺わたくし们わたくしが斯このあるをああれれば。紙かみ一枚まいでも受うけららんや況まことに冥めいくもかかる難むずのを。
ゆうて何なんせん。そそそそ依よぶ置おきぬへと推しの辞じと武士士官の聽きゆく。そそそそそそうゑ
ええ。ややきき。そそ謙けん退たい免めんけけ役ぎ義ぎと離はなる。これこれ遊ゆ山さんの獵りやく戶とききみみささざざの物もの受うけららん。
後ご日ひ面おもてを向むけかか。今霄よの肴くわい一いつかかててよと頗ほりほ鷹たかめ已まささとと木もく作さくハ
推しの辭じももる。兎とと受うけてて鳥銃とりのじゆうへ索さ引ひ掛かく肩かた被はう。登の時とき武士士官恭うやまく信のぶ乃の
立たて別べつととけ。そそ木もく作さく急いそひ引ひきめめ言い卒そつ介かいへへどど彼かれ主しゆ從しゆを打う伏ふかか。
おお身みの武藝ぶげいを又また知しぬ諸しよ國こくをうち巡まわりて武者ぶしゃ修しゆ行ぎやうを志しめめや飽あままふ武ぶ
磨みがせ東とうの國守くにのかみの御内おうち人ひともも傳つたわわざざももをを何なん處しよを宿すくひひる。既すでかかる日ひ
暮ぐれ。今宵よのち宿すくを仕あらん。さその三み數すうを交かせせ名な告こそそとと慇いん勤きんふふ向むかまま。
信のぶ乃のハ愚おふ由ゆ。又またかかうう微び笑わらく寔の和殿わだいの親切おやぢき。これこれの州しゆの相識あいし。

卷之四

清獻公集

されまごと憑て心地ぞもる然るを今さう隠さんや吾体へ武藏浪人ゆく大塚
信乃成孝と呼きゆく豫く死生を契りくる異姓の兄弟五名ゆ。故ゆて別れ
より既もち四稔を歴すいを遭んと爲ひつ旅より旅み旅宿へこの地へあるる
その爲の定宿ともあざれが今宵のあぐせうもえうの飲びの所えおも彼
武夫へ武田殿の家隸秋何と呼く人やんと問ひ木工作声を密ひて宴ふ賢察
せうる如く彼人國守の御家臣泊雪奈四郎秋實と呼く山林官領を職と
せうる殺生と好む暇な折毎あらの山ふ獵にて小人が宿所へも角らば
せうるはれ見過へかく和解ゆ。縛圓ゆふ治アハ但彼人の爲のあらゆ
とく村ゆえ更うれとひふ鄙語ふ似する幸ひ誘ゆ夜の深ぬ間ふ宿所へ伴ひある
らせん是方へ來させと先み立てゆと既み一時なり。その夜初更の左側ふ猿石の
宿所ふ届み。木工作へ女房夏引の由を告小廝出来ひ木を呼す
信乃を徳室ふ休らべ、夜食を薦め浴をうそ大さきす歎待も信乃へ
世ふ後かぬ歡ひを述く奴婢共が布儲、房臥簾ゆふる。枕ふ就き。う
翌々夙起て出くゆと用意をあらが。この夜俄頃ふ初雪あそて詰旦ゆき原
歌す山も里も白妙ふ積アミ深く夕もゆいあせきとおひるく早飯も果
比あ。ト木工作へ徳室ふ来そ信乃ふひゆ。今茲の夏の国ゆ。今ハ十月の季
急う節ハ十一月の中を過ぐ。ゆくがめや雪もあそうひくを似ける。野も
山も降埋らる。を急がゆふ旅ふあそび且く逗留矣か。かく山野の挣アモ
あす小人も亦徒然とが辯敵ふ足らざる聊慰らまう。その議ふ
従ひとく。辯を盡すとあを信乃も有數を推辞。僅ふその意ふ任せ
木工作斜き。す歡び。きの泊雪奈四郎が贈アする鬼を調理。酒を薦
やく終日相譚ひ消け。これより後も日次よきで或は曇り或は風。免雪まえく

降ふけれど信乃へ頻りふ苗やれぐ。名をも日と累る隨よつらく二の家のやうを見
き。やうもうのちふ。家ふ女房の後妻夏引。その名と夏引と呼む。年才三十四五許ふやうん
むうんそが容止も醜うござ又二八ぢやうする女見只一箇あり當面めやまづくもアリ
名やうみ三うあるす。あいとをうもあせば。すがゆる。ゆひだき。もも
顔は三月の櫻花ふ似て雨を厭ひ風を恨る風情や。姿へ秋夜の新月の優美雲
名へゆ。け。家
淡主鶴ふ消き歎きあるが如一常ふ奥まで操持を筑紫琴の調妙あり。
あうぎ。むすめ。を
彼俊蔭が女児ふも劣らトとモ伊豆えられその名を濱路となりやうな濱路々々
と呼ぶを紙門隔ひ復々毎ふ信乃アマ得ふ亡妻のゆのを。あふらひ坐て壁に向ひ
えぞく。げつすき。あれ
嘆息す現田舎ゆ四早う。兎女児どりす親ゑ。繫しぬれがや幼き母ハ折々叱り
たゞ。と
他人の拐り知えきよのゆのを後眞原ふ原ふ木工作が前妻の名を麻苗と
呼む。四稔立至るをて兎つ凡時疫ふ身さう後妻夏引ハ乳をひて仕へ。
女児濱路が嫁母き。渠が良人ハ世をきりとよべりのゆふ濱路が乳妻の
エ。よそ。ゆ。す
る兎が外より娶る。優ぐと木工作兵を推登して後妻ゆをうけ。然ハ
さがき
夏引が嫁ひき。村長の妻もき。家の女兒ハ云ふ為ふ主うけると子と
えぞく。初一年ゆよりの程り行狀を慎み。些も継女の方色せかひ。濱路と慈
あき。うち
愛。うち内ををあへ。木工作竊ふ欲びく物の出納その他ゆ。やう妻ふ往
て。うち。あひき。おこうや。ゆ。そよき
用ゆ。隨ひ夏引ハ早晚驕りつまく衣裳髪の錦や。已が身ふの縉羅を
盡。じよく濱路を初の如くみせず。荊國の守の山林管領泡雪奈四郎と密通
す。良入木工作が松木立ふや。山蘿屋ふ。曉を夜へ奈四郎を母屋ふ引入食
ふ。不義の樂を取ふること。然ども又奈四郎ハ或へ村役或へ山獵ふ假れそ。四
六城の宿所ふ起居を。木工作ハ元を曉得ら。只濱路のみ聴く猜そ。浅
やう足ども母を諫ふ。父を告。死るあひ心苦。娘も乳を夏引も
ゆ。ち。ゆ。ち
六城の宿所ふ起居を。木工作ハ元を曉得ら。只濱路のみ聴く猜そ。浅

達ふ願ひきうる。障りあるべからず。亦容易に所行ふわらむ。二の事ハ
且秘措く大塚や。放遣す。便宜を得る。争うむや。と肚裏み尋思と
考。織田假托け辯を設く。頻々信乃と田畠する。下ト態の懇切き。振拂ふ
死神のあられ。信乃へ治困ド果て。姑くその意仕し。只徒然ふ堪え。此の
家よりとあらる。太平記の翻本なり。傳々借よせ。繙き。獨僅ふ慰るみ高
十月の號や。あらぶ田舎へ耕作め暇あらば。奴婢木も甲夜うり臥房ふへそ寝
い矣。一、蕭然きふ。然とも信乃がいもねじ。今宵も孤燈ふうち對り。
彼太平記を閱む。第四の卷。中納言藤房遁世の段。藤房豫々相契り
。左衛門局とう。曾て女房許前。方頭髪きと遣り遣そよ。黒髪の乱れ
世をも。又入れば。今般の形見をも。不よとあり。と女房ひまうち。継々書置
君が玉章。身ふそえ。後の世。その像見をやせんと詠く。河水か身を沈めり。

又第十の卷。佐久左京亮貞俊が辞世の歌。小皆人の世ふわると。数
々で憂愁漏ね。うそえりと。曾てよろ妻誰見よと。信を人の田畠堪て
有死命。うぬふとよゑく。俱ふむきくなり。又廿二の卷。盧谷高貞護
死の段。この他新田楠氏父子の誠忠及新田の四天王と曾て。勇男臣木の終り
定。うぬふと。二五。彼と讀味。現忠臣の時。遇ざ。倭人の驕恣う。支婦の
情態。朋友の信不信。古を今と。今と曾て。相別。うりけ。も。遭ふ。年歴一。
五犬士のう心ひと。且妹と。伎の三ゆく節。死つる。濱路がる。胸ふ浮らむ
浩歎。や。巻を掩ふ。愀然。背のこふある。人わく。足音。せ。近つ。誰也
と向へ。濱路と答。信乃へ驚き。訝り。貌を改ら。其方。對ひ。日比。その名を
呼る。か。浦。雪え。う。知。ぬ。か。オハ。の。令弱。狄。何。ホ。の。故。小。夜深。獨
あら。あら。か。モ。ぞ。や。と。向へ。頭。そ。ち。掉。否。姿。の。の。女兒。良。も。今宵。わら。

女見ふはしも。ちん身と二世の契りあり。濱路を忘ひぬ。いわく怪ミ。そ。何事となり。やうて。舊里かわり。先結髪の妻の名も濱路と云呼ミ。ふ。オヤリて。もや四稔。ふき。然うを。ちん身。ふ云々。といふる。そ。さ。ろ。の。従。と。の。貞を。垂安時。うち目成。も。彖故。と。知。で。を。付。如右。も。無理。う。ぞ。妾の。四稔。こ。れ。つ。夏。彼左母二郎。非道の刃。命果敢。圓塚。火定の穴。花井。ら。ま。骨も。田。り。す。き。一。か。魂魄。は。是。且暮。よ。ちん身。の。ほ。う。か。黄縁。う。り。ち。欲き。る。も。あ。と。陰鬼陽人。方異。ま。不。本意。を得。遂。ぞ。う。つ。光。陰。と。過。一。ぬ。り。ふ。ま。う。き。わ。ト。の。女。兒。の。名。の。妾。と。同。ド。き。の。ま。う。で。ち。ん。身。と。月。下。か。結。と。る。宿因。も。形體。を。借。り。く。事。情。を。告。侍。り。曩。裏。ふ。ち。ん。身。と。妾。が。あ。せ。う。が。つ。ま。ゆ。と。の。ま。為。ふ。生。涯。妻。と。娶。ら。う。と。宣。べ。と。御。心。操。の。有。か。を。ま。い。忝。く。歡。り。う。れ。む。そ。の。言。の。葉。の。未。遂。く。こ。う。を。忘。ま。む。緯。の。便。宜。ふ。う。ち。任。して。只。こ。の。妙。を。妾。ご。

始。が。縁。と。結。ぐ。ゆ。よ。や。こ。ま。ら。の。る。ふ。就。く。て。禍。鬼。の。暴。る。と。も。亦。ゆ。う。キ。幸。草。の。花。さ。え。實。結。る。す。の。侍。ら。ん。か。ま。が。先。路。と。急。が。も。ふ。お。逗。留。空。か。と。告。る。言。語。も。容。止。も。よ。く。亡。妻。ふ。似。く。う。り。緯。の。不。測。み。此。ち。騒。が。信。乃。ば。く。うち。伎。く。幽。冥。の。る。鬼。神。の。う。凡。智。ふ。測。り。易。か。く。ど。も。男。女。夜。深。く。相。譚。る。是。凡。田。の。屢。李。下。の。冠。人。の。疑。ひ。を。い。な。せ。る。身。の。宿。意。を。告。ん。そ。人の。女。兒。ふ。濡。衣。を。被。む。仁。義。の。所。行。ふ。あ。ず。され。も。亦。こ。の。故。ふ。あ。ず。支。婦。の。恨。を。惹。か。の。ひ。そ。あ。う。う。べ。そ。く。立。去。り。空。ぞ。や。と。ひ。ま。く。よ。と。う。泣。て。急。て。や。こ。の。ミ。厭。せ。め。の。ぞ。人。の。形。貌。と。假。染。み。の。ひ。暇。と。る。ま。ど。も。靈。玉。む。身。を。守。く。せ。ゆ。く。心。後。ま。く。お。ひ。る。そ。ひ。盡。ま。る。ふ。か。へ。と。六。曉。報。る。き。ぬ。の。鐘。よ。り。強。顔。き。捨。言。葉。心。つ。よ。と。怨。む。折。う。隔。の。紙。戸。を。破。と。ひ。た。て。淫。奔。者。を。見。ゆ。う。衆。皆。起。よ。と。呼。く。の。是。則。別。人。よ。む。か。ト。の。女。房。



大辭書卷四

卷之三

占々左見右見つ夏引ひ對ひ濱路はり此の情由ゆとも小夜深よみが人ひと。できよりよびをむら。そぞろ騒さわぎ一いき出来あらわを呼紀よみととう不覺ふかくう死しと窘きずなも夏引ひ忽地こつけ勃然はつとと。乳身うぶが例たとの落つき自おのき妾めしが豫よそひよる。秋濱路あきはりを守まへ願ねがひやううと給事きじみみ。あやせあやせ生おのつと遊あそべての宿しゆ所しょ存そんせせよよとと。ああううどど鬼きのモの頭かしらよ置露おき路ぢむづ。聽きを今霄よ及およびびと悔くやくく身みををとと。席せき薦すす敲たたきき敦園とうえんを木木工作じゅ聽きをを頭かしらと掉うなげくくある置おきやや幼おやや濱路はりとと。かかももあまと大塚おおつかぬぬ人の女兒めのわらわととみみう事ことややををややだだつつとと今渠いま渠くわ向むけくくああ。黙黙てて參さんふふややと推禁すきんらら女兒めのわらわとと對ひ濱路はり何なんホホの所ところ要いのちありと夜深よみがてて來き。うういいぞ惡あくを告ごよよいいああややと屢たま問たずきき恥はずががふふ頭かしらと握にぎくく四よ下げを見みかか。何なんの故ゆゑや知しぎりりと向むけせせああふ心こころつつききぬ甲夜こうやよりよりりままうち臥くろて熟じゆ睡しうういい。夢ゆめああふふいいと美うつくしし少すくな女子じよの枕まくらよ立たつて呼よ覚おぼ。今宵よを身みと勞なぐして大塚おおつかぬぬよ如そ此ご。

如此とひきゆき欲きて侍りあきえ來させと先か立く伴そと名ひの。その後の
るをあらむ侍りそく何事といふめ。もぐて覺る心地にて面目もく侍りとつ。
當下信乃ハ感歎の牌を破と打拍うとこれゆく合まるよりありあらずに支
婦也。某舊里在す一時結髪の未通女あり。その名と濱路と喰做へ。方
余るふ渠故あり。思棍の爲め勾引すと從ふて節ふ死へ。さすがの
名も年紀も似て息女の肢體を借す。今宵竊よ某ふりひのひの亡
魂の所為とぞれ。寔ひ奇へかと疑似の傍難と解するを願へ。と
久出来ぬ腹を抱て俯て仰ぎて笑ひ。手あらへ。かとう餘程実のある
作あら。死靈あきる當座の脱路有理らしくやあれど僕などろるむ阿家
さぬ感心をれ。狹とむろ火つけ嘲けと。とととと夏引ひ領き人のはをぬ
故郷のゆき結髪せれ。妙もをき。名うけ。狹とが寛魂の所為をうへ證据も

あくで疑ひ。然とも正乎に證やぬると詰ると木工作推禁らく復しても出来ぬ
奴が濱路の穿鑿と。お汝よ頼む。危無益の口を呴ん。より臥房へ退きて
寝。モヤ夏引も亦大人氣る。数も足らぬ小廝の過言ふ相槌を打る。とや
あ。寔小女子と小人ハ娘ひきのゆそと歎息。と信乃ふ對ひ。大塙ぬ。と
見口舌を傷痛く。お汝妻奴子ハ左もり右もり。某の疑心。と願ふ。人意
をきひそ殊き。ふ歎した。女児と貴所の亡室と同名の義ふ仗。と早く。寢が。才子
馮。りくの。お。と。一奇談ハ俺们親子の幸ひ。既かあまとの便宜。と。方先や
脣憶と盡ま。某原の信濃の人氏。蓼科太郎市と呼。と。獨見。う
親ゆ。太郎市。井丹三直秀。ゆ。仕。と。直秀。ゆ。春王安王。兩公達の。ち
身方。ゆ。結城の城。と。籠り。ゆ。嘉吉元年夏四月。落城の日。小血戦。と。竟ふ
陣。歿。お。ゆ。このと。蓼科太郎市。既か深瘡と負。か。辛くて信濃。か。そ。

その方があふ云々と報り。躬を腹に切く冥土の供と仕る。某が尚總角より。母年來病ふあり。その死後春世をさう。さまで結城の残黨を里人ある。心とかげ。舊里の住ひ遂ふ稱を。この地ふ外伯父あり。かづび行く身を寓せり。伯父支婦み男児を。只一箇の女児あり。その名を麻苗と呼做す。有此而送よ。年長。女児と某が妻へ婚養嗣。せしれけ。尔後養父母の世を去りて某村長の職を承嗣。ふさう。そえ。と富むやう。貪らもあらず。尔るふ某弱冠。殺生を好み。暇を折毎。山獵と事。うそ鳥獸の命を捕ること。いそぞそとのふと覺ゆかる故也。齡四十。近侍。子。一箇もある。されば。麻苗。これをうち歎き。云々。殺生の報ひ。子孫の榮と樂ひ。山獵を歎き。と。只官ふ諫り。をよくも。聴き。あうけ。一日黒驪の邊中山の山間。てひと大きう。就鳥と數み。かゞ。程。よその處。一町あまり。山邊。樹杪。小児の泣声。せふ。怪と。おひて。ゆなく。年一二三才。許き。偃子の老。櫛の枝。根。また。声嗄る。まく。肺。登時。甘木。ぬ。かる。深山の樹上。稚児のわゆ。兌理。彼。就鳥。と。攫。まく。霎。時。彼。處。措。まく。然。ふ。鶯。ふ。程。まく。撃。す。一。就鳥。と。數み。かゞ。程。よその處。一。町。あまり。山邊。樹杪。小児の泣声。卸。と。見。や。と。そ。樹。登。り。辛。う。と。抱。き。卸。と。よ。か。な。み。尚。仰。仰。貴人の息女。や。わ。ん。七宝。と。掘。箔。と。條龍。膽。の。服。章。と。足。桂。衣。袖。長。き。被。く。下。み。緋。の。衣。と。何。處。の。誰。が。子。き。と。向。へ。ど。の。の。と。内。も。只。二。才。大。三。才。の。稚。兒。の。泣。と。外。よ。所。為。も。み。れ。が。且。懷。み。を。抱。き。擊。缶。と。一。件。の。就。鳥。只。美。羽。と。之。援。と。よ。く。相。携。つ。宿。所。と。か。と。妻。麻。苗。ふ。云。云。と。有。つ。よ。と。報。知。セ。素。麻。苗。を。どう。き。且。欲。ひ。く。この。児。ハ。天。よ。う。俺。们。支。婦。と。授。與。一。の。う。べ。是。は。就。よ。も。殺。生。と。お。ひ。止。ま。の。と。涙。う。と。之。諫。る。ふ。ぞ。某。を。す。い。感。悟。

考く宣より後ハ猶み出モ奴女の子又乳母と隸ミ愛慕ミ類キ。そが名を
さる知るト。されば恥ミ餌漏と名つニまきこへ就鳥の餌漏主モコ子と
する義を取りテ。かくそその名と呼び誨ミ。顔と背けと答せず。こゝ名のころふ
恵ぬ故娘と男入ガ蜃名と更ニ呼べどもく應とせず。かゞヤ程みこの村ヨリ一里を
東のこゝ字を濱路とひ。六齋の市場アリ。奴婢もどぐ其處ヨ到り。物を賣
そりあつる。毎ふある。濱路。や々とひ。毎すゝ。女兒の足からにて。
優エアド。と妻もひ。某も如右思ふ。又濱路と呼ぶ。また。妻もひ。又
かゞ六七才の比より。手習縫刺の技ハ。うえ書よむる。も管絃も。その師と
あ。拓き学。も。年來ふき。余る前妻麻苗。四稔。己前ふ。おきて。
内を貢ふ。の。年。濱路が乳母を推登。後妻ふ。す。の。夏引

是渠良人もその子え死別せりのあれ久くあよ仕へる素より乳
母のるやわれば得あくぬ女人と娶らるより濱路が為ふよろべーと女バ如古
計ひこのうえよき婿とよそ春の比よりれ彼と心ふ擇りどあくば死のれとも
あでうち過せりふるのう死のふようちを身を宿所す田めあくせ器量骨相
進止武藝不捷生來のる事も面りみ乍き情願ありひて濱路が婿ふ欲得
とるふのうりひあく村長列の某きどが婿養嗣ふりあんや便を討り守ふ
薦めく御内人よ成一まるせきがこの便宜をりて云々とよりを告姫を結びくつ
宿願と累さんまことひのまく女兒も妻あらひまく告知せせむかく立まく
あくと事ふ假托け推制ぬと一日々々と過せりよ豈測らんや今霄の一奇事。
世ふえ兒か自身の内君と云ふ女兒ハ同名すくその亡魂の女兒ふ馳りそめいれ
免人の再結ふ縁ふふを願ふ思衷と憐みてこの婚姻を許し矣世ふ某が望足り

てん秉引をと縁をも亭環をと長物をすふ冬の夜還て短きやる曉方みありす。

第六十九回 仕官を謀く木工作信乃を豪留せ

給事と薦て奈四郎四六城を撃ひ

信乃は木工作が昔からぞうら便そ感歎を以て之を手に一樹の蔭一河の流も
縁をとば寓ること世の常言めいす。宜て吾俗ちや和殿をのぞ居停主人と
のものへふ原来井丹三直秀や小仕へる蓼科太郎市と争うるの児うり一矢
今きみ又何を懲んこど母の諱と手束と呼ひて則直秀ぬの女早うだつ
あらか不つせうきみのりう。大父大塚直作と成大人の直秀やと井侶ふ結城ふ籠城ある折子井の為
秦晋の因を結びゆるわづとその義と果をとく。且大父直秀や
共ト戦歿をあひよ。尔後如此々の故ゆく。父大塚直作大人と直秀の
そぢやうあひ。きみをせうゆ。やあまつげ。も。わ。ひ。き。
息女と環會く送ふ素生と諦ら。親と親と結髪する妹と仗られ巴異議も

タ。躰く丈婦めうりあひ。吾体を産一ゆえか。且木工作幼稚き比二親の
夜詰め直秀ぬの戦歿のそ緯の趣も故郷へ訃を告來一。彼老黨の
忠死の下も傳聞あらわづ。とそ姓と何うのひけん定ふ紀憶せざり
し。和殿が今宵の物うゆく稍具あるとゆう。寔め不測の因縁あり死
き。直秀ぬの外孫うぶ。爲も亦主筋え抜もく。とむろく只顧感歎をう
け。まぶすとの幾條を側ねま。後妻夏引ひ直と呆もく。ゆもく出来
し。あ。と目と注し。あもむがよことおふるる養母の心と表裏う。濱路實の親の名と
知るよ。もうち身の幸をと又拊育の恩高き養父のむせ名ひ汲む涙の
泉を切く。抑抗ふもうや竭ぬ袖の暇へきり。信乃も頻くふ慷慨嗟嘆の貌を
あら。改めあら。對ひ。嘯四六城の叟親が大く寄りする吾体をも懇望せられて。

まとも腹裡へさああも濱路が宿所は在る。がふも目上み詭く癪うるふ。又
大塚と壻ゆく守の御内人ませられき。ひづみくふが爲よ。死縛の障の
是彼ゆく奈四郎ぬよあかくさん然がとく今禁りて疑ひん必定也。
雲安時そひ意ようち任ゆく奈四郎ぬを招く。叔彼人の來ゆき折ゆ意
中を告く商量せふ。又尋思のうく。どひよければ只管ふ。その分
別を稱賛く泡雪ぬを一日もと。招きゆくと。そぞもふぞ木工作ゆく心
決く。次の日奈四郎が宿所は到りく。對面と請ゆく。寒く暖を演ゆる日より
頃を置く。彼鳥銃と返していゆ。お見比穴山ゆく彼事わく。旅客は甘某が主
すが。おつらまのうづ。よが。まのう。おもえ。筋ゆく。大塚信乃成孝と呼ぶ。武藏州の人氏うりよと宿所は伴ひかく。そ
ま。今も家を退田せり。勿論かの時某が和解よまく無異よ。口り當座は和睦
を。未ゆく。遺恨ある。ぞうのうねども時宜よよく。彼人も長く當地め在著く

。よ。よりそ入懇を願ふが為よ薄酒を薦めあるせんと。案内さうみ推參をり。
願ふ。翠の末の比より先臨を更う。待奉ると町寧まゆまく奈四郎歡がす。
肚裏ふらすやう。これ頃日ハ猶も出む四六城ヶ宿所へ立よそ夏引もあらざる
今初そその名をやス。彼犬塚信乃とすん。主従ひそ打とる面目きよ
よりて然るそ翠又宿所よ拓き。彼奴と一席よく酒を勧んといふ木工作
又是信乃が方人よく飽やきこれを破滅ふ付ん。較計するをぞあらん。そん
少りともやどとひど。これ只後とすうとひえ。その意ふ任。彼處み到まそ。尙
堪え。あらわす。信乃と木工作一家の男女を鹿鑿み。逐電せん。三十六計詐
欺を上す。嗚呼。少くとくふ心を氣色み。びゆも頭さず。頻々ふ領き含笑そ。
今よもや和殿の親切いさう行ざん。彼犬塚ねとすん和殿。舊縁あり
よ。とくやう。ちぢやう。と。きゅう。きまう。そもん

怠慢悔是より及ばず。大塚やむこれらよりと。言傳くゆく。翌ハ此の公務
ありともそも同僚よ委ね措く。時刻と違ひ必也ん。され我ホが為のこゑバ酒
食の儲かあももよ。うち相譚ふそ樂三昧。と實ゆく。應對ゆく。松茶を薦め
果子と羞恥大さうぞ。管待ゆく。木工作ハ意外の首尾。且歎び。且感し。
翌と契ヤ多く遠く。家路を望みかうけり。かそ次の日より。かば泡雪奈四郎
秋実ハこの年來親しく使ふ。媼内櫻内と。兩箇の奴隸。事情と耳き示す。
助太刀の為ゆく。兩人共めこれを從へ。曾試の利刀寢刀をわべく。肌膚ゆく鱗の
著笠。又り。小倉織の馬上袴。仁田山袖の小袖。二ツ。むく。被て。未の半過る
比四六城が宿所。赴き。木工作。みづ。出迎へ。客房。請。躰て。盃を
勧。と。後妻夏引も良人と共。肴と添え。酌。立。歎待態。大。か。ご。り。す。
盃一巡。及び。と。木工作。徳室。赴き。信乃。よ。ゆ。る。右。日途。事
あ。奈四郎。ゆ。の詣来ゆ。そ。對面。と。請。ゆ。聊。酒食。も。客房。赴き
も。然。と。笠。又。え。よ。亦。徒。然。と。慰。る。よ。も。が。そ。そ。ゆ。誘。定。と。く
い。そ。立。を。信。乃。ハ。有。繫。よ。推。辭。る。そ。一段。の。ゆ。そ。衣脱。更。程。ゆ。え
和殿。ゆ。の。よ。と。泡雪。ゆ。報。ゆ。と。木。工作。邊。く。余。く。彼。處。ぐ。俟
奉。ら。ん。疾。來。ゆ。と。ひ。き。又。客。房。よ。赴。き。け。り。當。下。信。乃。ハ。名。ゆ。彼。奈
四。郎。ハ。小。人。と。武。士。よ。似。け。り。瀆。と。る。手。癖。ハ。既。よ。見。届。け。る。彼。奴。と。席。を
俱。と。く。酒。食。の。歎。待。よ。與。ら。が。そ。盜。跖。を。友。と。く。惡。木。の。蔭。よ。遊。ぶ。似。す。
ゆ。も。ち。が。き。と。心。で。爪。彈。を。あ。れ。が。も。渠。ハ。る。わ。か。も。ゆ。と。木。工作。が。懇。切。よ。
誘。引。る。と。許。諾。ゆ。ゆ。已。死。る。ゆ。行。狀。を。うち。披。き。衣。う。如。て。袴。と
穿。く。村。兩。の。一。刀。と。腰。よ。帶。り。扇。と。拿。く。件。の。席。よ。赴。き。る。奈。四。郎。ふ。對。面
あ。き。別。已。後。の。安。否。と。訊。ね。そ。席。末。ふ。坐。を。占。と。奈。四。郎。羞。て。席。を。讓。り。

上座の請薦と。信乃ひゆく謙退りて聊も膝を進めず。静かに四表八
表を相譲る。辭寡く愛敬あり。先度のことを忘れて如く。武藝を誇る氣
色みけど。奈四郎はるかに違ひ。豫その用心詭詰。その機を測るも。
が心ともなくうち解く。只管信乃と敬ひけり。然程木工作へ準備の散数を
盡く。屢々奈四郎は不血を薦め。從者媼内帳内にて次の間を呼登り。出来
事あらわす。人手を敵手より。酒うち飲せども。程は冬の日暮。没果うか。木工作へ
彼此の燭を点さず。奈四郎主従信乃はゆる夜食と羞恥復盆を更め。
饗應をいたく。町喧れが客のあても醉寝す。且しく奈四郎は中刀を引
提く。むとう淨手は立んと。未だ夏引の縁は便宜を以て。紙燭を秉り。先め
立す。縁頬を障子を推開き。東の険室の案内にて。物の蔭は立聚合。扱
るる夜の縛の趣。濱路をも。名は依く大塚信乃が亡妻の靈の馮。と
おもふ。及木工作へ信乃をひそかに。女婿はまく欲するゆゑ。辭みく。耳にきく。濱
路の宿所は在る。あもん身とあれば。邪魔なる。信乃は女婿を連れぬ。ゆく
中垣と居ら。ゆく。瀬は遠よ絶果。是れ濱路を遠離。信乃と去る。謀はある
あ。と向ふと奈四郎は。彼大塚奴が仇たが折。他御へ赴く。杖あらを
いよぞや。けふちで。あよ笛を。木工作も亦怨しきれ。且等ゆと頭を傾け。要時
按じく。莞尔とうら笑み。縛の舍卒の折られ。妙策。脣よりて。あく。箇様
箇様よ詭計。もく。濱路をも。遠ざげ。濱路をも。むきと死へ。信乃も亦
退屈。もく。必他御へ赴く。登時。途す。埋伏。もく。闇撃。もく。と死へ。先度の遺
恨を。奪ふ。も足。も。この議ひ。ひと。甚しく。と夏引へ。ゆく。含笑。そへ。究竟の妙
案。ふ。不覺。晚落。ゆる。と謀。一合。もく。遠く。先ふ立ち。又案内。もく。舊の坐
席。ふ。伴ひ。ゆく。然程。ふ。奈四郎。ひそかに。醉ふ。面色と。頻り。ふ。盃を。推辞。ふ。木工作も

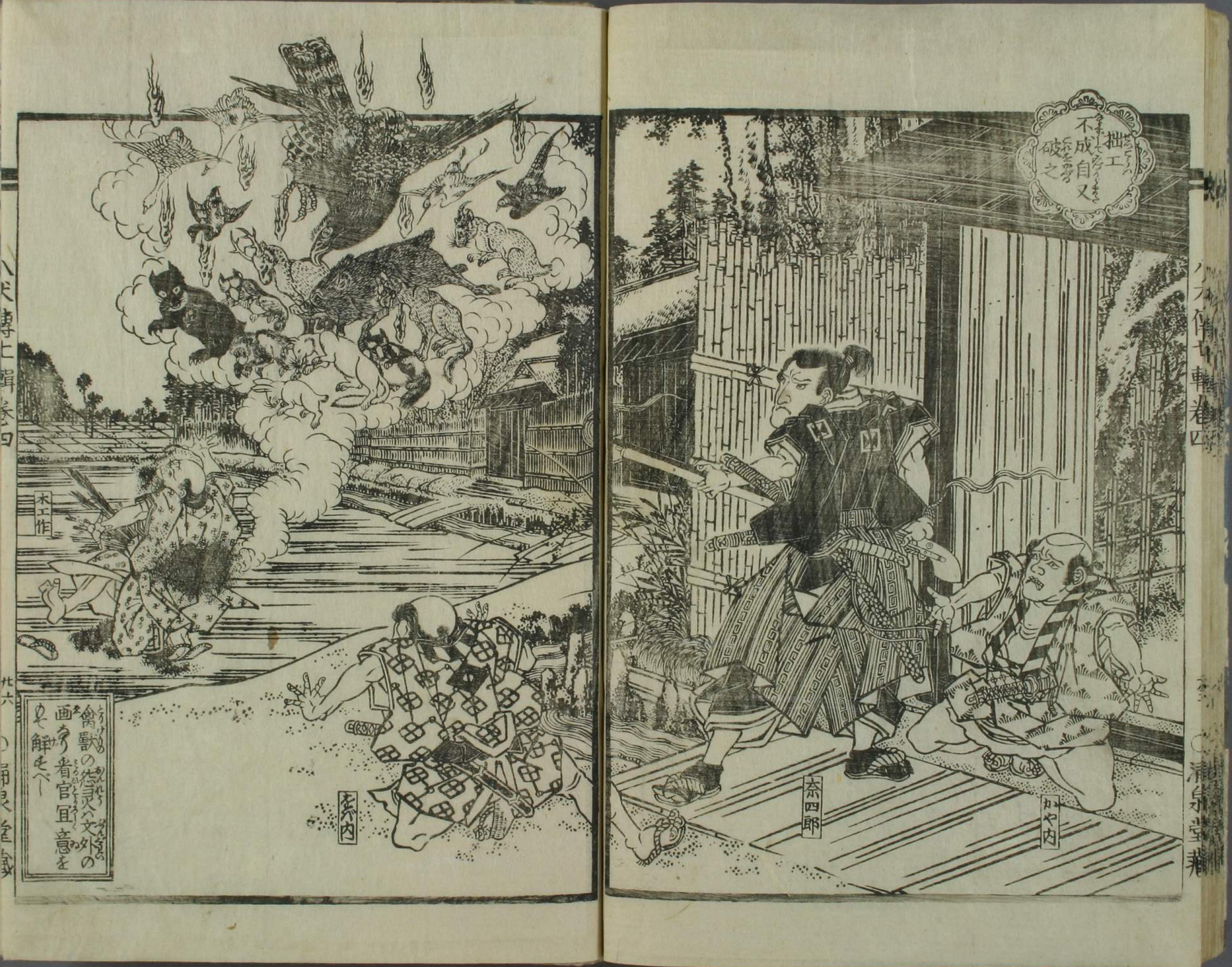
淳。奴婢。盃盤。納。茶。薦。果子。引。程。更。鐘。安。奈四郎。鄉食心。歡。述別。告。從者。宿。所。送。端。鶴。駕。杜。酒宴。果。祝。却説。次。日本工作。泡雪。許。赴。駕。鶴。杜。異。所。來。西。二日。義。果。次。美。齋。木工作。宿。所。遣。木工作。懈。便。公私。所。要。あれ。翌。の。朝。對。面。欲。就。珍。物。公。謝。義。と。あ。餘。ハ。面。會。俟。木。工。作。考。讀。ト。華。日。の。謝。義。と。あ。餘。ハ。面。會。俟。木。工。作。考。讀。返。い。そ。く。硯。引。回。報。町。寧。書。写。も。み。そ。く。使。送。ト。見。高。味。一。種。寫。有。記。生。辱。追。參。此。よ。う。一。人。と。少。内。果。躰。躡。崎。歸。且。木。工。作。掌。拍。夏。引。呼。泡。雪。よ。使。を。招。今。よ。ベ。例。の。袴。か。一。夜。兩。三。日。已。前。よ。行。之。日。光。臨。歡。演。る。と。あ。が。い。す。村。役。拘。ひ。て。き。の。や。が。そ。の。義。を。る。ぎ。た。け。の。朝。よ。暇。の。あ。い。一。人。と。夢。の。が。よ。か。ア。モ。宵。ま。折。う。ち。騒。が。い。と。懶。く。後。手。よ。き。告。る。も。益。あ。る。の。う。昨。宵。つ。が。枕。方。よ。の。わ。あ。れ。ぬ。鳥。獸。の。い。と。あ。り。聚。ひ。来。り。牙。頭。一。紫。鳴。責。る。と。大。き。よ。ぞ。或。ハ。頭。喙。あり。或。ハ。呑。喫。著。く。あ。り。その。苦。痛。い。ば。う。わ。ざ。叫。ん。と。も。よ。声。戸。も。全。身。食。盡。れ。そ。骨。送。ま。ど。う。よ。き。よ。ひ。駭。見。う。怪。有。う。夢。あ。う。よ。と。告。傷。よ。浜。路。も。す。つ。ど。と。ち。便。く。そ。う。と。怪。る。夢。え。け。一。日。齋。く。出。矣。ね。す。

優とあつと。と禁るを夏引へ冷笑ひく。憶のく。何うもぐん然る物よ魔
生ある。あん身の壯なり。比殺生をの事と。猶う一ゆひと。今で悔
あく。やうか心より。夢すをあき。よろづの事へ祝ひ柄すよと。うむ。
泡雪ぬ。おとく行んとひり行あひ。その祟アそア。夢すやうて。死の
為よ。ゆきうどく。おとせあり。と言語雄々しく。説破。木工作然そと。領
きく。そある。袴の前。片足替ふ。踏入り。後方。腰板。突立。夏引が
ある。腰板。良人の心。斜。桟箇。縫の二條。建結。手加減四條。刎の長
短。定め。死人の命の累。敢う。り是と。この世の別と。後。みぞ。合え
け。然程。木工作。只。管路。と。奈四郎。奈四郎。宿所。到。云云。と。呼門六
奈四郎。軀。已。便室。呼へ。對面。送の口誼。言訖。と。豫。准備。やまう
け。嬢内。帽内。給仕。盃。勧。者。按排。歎待。大き。さう。け。盃。四五

度。及び。と。奈四郎。両箇。僕。庖厨。ふ退。膝。進め。木工
作。額。合。耳。今日。拓き。う。せ。る。愛。か。死密。説。よ。す。り。
足下。ゆ。豫。知。如。御曹司信綱君。信虎の父。武田信昌の嫡子。
量。よ。容止。美。素。生。賤。か。ぬ。り。女兒。擇。壁。妾。よ。す。り。せ。よ
と。あり。密説。を。奉。就。愚。按。回。ら。和。殿。令。愛。濱。路。と。す。ん。標
致。ひ。心操。と。世。評。判。隠。れ。甘。榮。亦。貴。宅。外。う。と。て。二。を。知。り。
か。且。濱。路。某。姪。と。ま。一。做。信綱君。や。あ。せ。ん。御寵。愛。日。倍。
世嗣。の。君。を。産。ゆ。そ。の。身。の。榮。華。か。す。と。和。殿。國。守。の。外。戚。す。と。そ。の。流。
依。る。甘。え。面。起。出。世。婚。誰。う。と。れ。を。差。ぎ。再。る。う。と。洪。福。え。ば。且。試。
云。と。ゆ。え。あ。が。奉。ア。よ。あ。然。教。び。淺。う。と。そ。の。濱。路。を。ま。せ。よ。と。今。朝。
仰。下。え。う。よ。と。御。説。傳。る。そ。あ。支。度。を。整。へ。さ。り。宿。所。を。か。う。來。これ。よ。

忽諸のあたひそと真一ちよ説示せ。木工作役つ太息を吻く。呆として要時の心
せを恨みる氣色を。ひびき。汲引ひく。濱路を古さう。緯一條一両月も
已前。前より。障りき。渠は某が主筋。大塚信乃と既も。嫁縁と結ひ。り。
いも。披露す及孫も。主ある女子より。かん美と仕へ。此の義を。左。右。
き。見えあげ。り。とのせ。果モ奈四郎の眼と。瞪。声あり。立。木工作それ何と
。おづらまの。こけう。らう。そ。る。い。ゆ。み。ぐ。の。せ。
いふ。大塚信乃。他御の浪人。猿石村の人別。す。載られ。る。の。う。ぬ。口約束の。姫談
。あや。と。や。う。一。卫。死。ふ。う。死。や。濱路。が。る。甘。ホ。が。ん。美。と。ま。う。セ。よ。今。け。障。り。を
。や。う。一。女。が。汝。ホ。一。家。の。こ。う。モ。コ。う。の。罪。を。脱。き。さ。て。一。期。の。浮沈。あ。す。あり。
漫。す。の。と。い。と。え。深念。あ。き。よ。い。ふ。ぞ。や。と。睨。詰。る。面。被。ち。ふ。刀。を。拈。て。權。せ。ど。も。
む。く。き。ち。と。ひ。の。ま。。お。ゆ。ひ。の。も。も。あ。り。そ。が。り。く。さ。
木。作。此。の。快。を。モ。う。む。う。宣。ふ。も。親。の。許。ふ。獨。女。と。理。る。側。室。ふ。百。ミ。と。そ
つ。ふ。を。こう。お。ふ。き。も。き。罪。を。犯。人。を。殺。一。民。の。父。母。き。君。う。う。ど。そ。べ。甲斐。四。箇。郡。の。常。闇。す。う。果。ぬ

べ。み。く。名。ひ。ゆ。う。婚。姻。の。住。所。の。遠。近。と。傍。の。ゆ。む。よ。他。御。の。客。と。も。
え。む。ま。れ。き。き。ま。う。き。う。う。ひ。と。姉。を。結。ぶ。是。と。親。一。况。て。舊。縁。あ。人。を。あ。ま。う。か。う。う。誠。心。と。濱。路。が。為。婚。事。の
級。引。せ。不。安。入。ゆ。初。よ。う。其。が。胸。中。と。よ。向。決。め。と。扱。尔。後。す。云。云。と。や。メ。え。あ。が。る。
き。ふ。他。人。の。女。兒。と。う。物。貞。と。親。ゆ。も。あ。せ。モ。姪。と。守。と。誘。ひ。へ。と。憚。り。ゆ。
エ。う。う。只。見。千。慮。の。失。狀。尤。疎。忽。とい。ふ。死。の。某。の。數。ゆ。も。足。し。ぬ。愚。痴。の。匹。夫。よ
り。ど。も。獨。女。の。色。と。の。榮。利。を。欲。する。と。恥。と。モ。願。く。女。兒。濱。路。が。代。よ。大。塚。殿。と
薦。揚。く。御。内。人。よ。召。措。る。か。ん。計。ひ。と。あ。ま。う。け。れ。彼。大。塚。ハ。武。藝。の。達。人。當。今
無。双。の。賢。者。か。る。俊。士。を。汲。引。と。守。の。御。用。よ。達。名。を。美女。を。薦。也。榮。利。を。料。る。
先。案。と。延。逕。ゆ。り。か。く。ぞ。君。の。祿。と。食。む。良。臣。とい。れ。東。ん。戻。よ。外。よ。陳。ぞ。死。を。答。へ
い。か。ぞ。暇。ま。う。と。身。と。起。を。酒。氣。を。帶。す。木。工。作。が。常。よ。ゆ。わ。で。敦。閨。暴。く。席。を。蹴
。を。き。ま。ま。
立。紙。戸。を。ひ。き。も。外。面。へ。出。を。す。奈。四。郎。の。飽。す。よ。木。工。作。よ。馬。辱。や。れ。怒。氣。



脣の満腸燃く面色宛焼くが如く争ふをもふ辯を浴ざれバ柱より掛る鳥銃をも
取り手を籠て火縄の頭と指燐る火盆を胸と跳り踰て遣り過て追蒐出る。
折戸口より又まさせが木工作ハ一町ぢり家路のまへて處を火蓋を反て檻と放せが。
憐むべ木工作ハ七九の前邊より腹まで破と轍を拔生る両銃をよ零時もの堪せ
骨碎け腸断離き。苦痛の声と共鳴す仰反仆として息絶す。この物傷首すまてそ
來。両箇の奴隸媼内木を奈四郎キヌテ。その百姓奴が法外き過言と汝木も
死つん。そもそも活てあえられぬ癖者あれバ數を角ら一を此終守へ訴あうさゞか身の安
危側か。かく算計較もあるれども死骸をもり入れよとのふよ媼内懐内ハ齊一
彼处よまづ木工作を殲を宙よ吊して奥庭する樹蔭へ躊躇ひ畢竟
奈四郎が木工作を擊殺て又甚麼う語説ある。そく次の卷よ解分るを聽ひか。

里見八犬傳第七輯卷之四 終

曲亭主人自評にて云大約大士の妻子眷属するの濱路沿蘭雑衣曳手
單節木貞操心烈よりつゆは捷早も咸薄命めく支婦階老よ至るぞあれらも
所以あるをと。よハ解盡かう。全輯結局の段よ追く省官冰解をもる
あんそぶ中ふ沿蘭雑衣曳手單節の四婦人ハ各々良人よ眞眉く日の久江よ
あひど。既す鶯脣の衾を襲く。潘楊の睡み空か。只濱路のみ余だ赤繩
足を繫ぐと。合巣よ整く。身ハ惡棍よ傷殺せられ。箕幕を冥府よ執
る由。誰う行を憐ざんかる。よ別一個の濱路。あそ更よ信乃と匹配を便
是二女一体寃鬼陽人異れど。前身後身一般の如。この処作者一段の工緻ゆく
初う意中少包藏。者官後話をもひゆ。只、又よとうをのと推て評も。ありと
き。細工の流々落成を。よと/or鄙語。似る。よろづのうすヨヌラベ。
ほいでよいよくほきる。あり。アゲ著。草紙物語の。みて二三十年よ及ぶ。の
刺板若干失く全うする故をり。そく刷出せる。また板も。わき。索て補

○刺すの予が校訂を乞ひ。恣と有像を易文を行脱して再刷をと便え。竹云
括頭巾縮緬帛衣化競五三鐘。この他無あべ。これら予が名号ありとども補
刺す予が校訂を経ゆ。他人の名と成まるのれ。予が全作とまづぞ古板の戲編と
物。多くは大人氣を乞ふ。名を售るゝが腌腊。此とよりを識。之。

○本輯七卷。楮數をヨリ。あをりて彫刻先成る所の四卷を贅て上帙とく
發販を下帙三卷の程遠か。モ推づき。出さんとふ書肆の好みに任す。山前
山後花一時よ病。看官異日の見りを俟て。猶春深く繙き矣。

○曲亭翁著編里見八犬傳第七輯画者筆工刷人目次

有像

卷一二三四

溪齋英泉画

淨書

卷五六七

柳川重信画

筑波仙橘

谷

金川

橘

里見八犬傳

第七輯下帙

五の巻

六の巻

七の巻

右近日推づき制衣本筋裏を要出し
やのれをも求め御質をひそむ
大人小兒も一切の妙葉

藥方根元本家

王九牛

大包百羽

半包四十八羽

河内屋重太郎製

南總里見八犬傳第八輯

曲亭翁著
初輯より第六輯まで先年より追々開板
第七輯此度發販第八輯來已の春出版

尼子九牛一毛傳

右同著初集五巻

近 刷

文政十一年戊子春三月吉日發行

小傳馬町三丁目

江戸書林

心齋橋筋博旁町北江入

大坂書林

丁子屋平兵衛

七
月
七
日
松
野
鶴
居
院

